

富山型デイサービス（共生ケア）の事業展開の実態と効果に関する研究

ーエピソード分析の試みを通してー

○ 日本福祉大学地域ケア研究推進センター 奥田 佑子 (5550)

平野 隆之 (日本福祉大学・814)、佐藤 真澄 (山口芸術大学・5153)

キーワード3つ：富山型デイ・共生ケア・多様な関係性

1. 研究目的

「富山型デイサービス」（以下、富山型デイ）は、1993年に「このゆびと一まれ」の自発的な実践から始まった、障がいの種別や年齢を問わず、誰でもが利用できるデイサービスである。その後、県や市の補助事業や特区の活用、事業所間でのネットワークの活動等により、現在、県下で100か所を超える実践が取り組まれている。国や他県からも注目を集めており、被災地での新たな福祉施策や、滋賀県、熊本県、佐賀県等での県単独事業にも取り入れられている。

富山型デイの魅力は地域のニーズに柔軟にこたえることができる多機能性と、デイサービスの場での多様な人間関係が、居場所や役割につながること（共生ケア）である。しかし、富山県下に100か所を超える実践が普及しているが、共生の形はさまざまであり、いずれの実践においても、多様な関係性を形成できているわけではない。本研究では、エピソードの記述を含むアンケート調査を通して、富山型デイサービスが共生ケアをどのように実施しているのか、その実態と効果を検証することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

富山型デイサービスを実施する事業所に対して郵送によるアンケート調査を実施した。アンケートは、富山県の調査研究の委託を受けた日本福祉大学地域ケア研究推進センターと富山県の共同で実施している。

【アンケート調査の実施方法】

実施期間：平成26年2月18日～2月28日（調査把握基準日は1月末時点）

調査方法：郵送による自記式調査

調査の対象と回収数：富山型デイサービス99か所、回答64か所（回収率64%）

【調査項目と分析視点】

- ① 共生ケアを提供する事業体制：制度事業、自主事業の実施状況
- ② 共生ケアの利用実態：1月の利用実績および、曜日・時間による人数構成の変化
- ③ 共生ケアの効果：自由記述によるエピソードの把握

3. 倫理的配慮

結果は、集計値のみを扱い、個別の実践が特定されないことがないよう配慮している。

4. 研究結果

1) 共生型の利用を担保するための制度サービス・自主事業の実施状況

制度サービスでは、主に高齢者の「通所介護」と障がい者の「生活介護」を実施し、他の事業が付随する形をとっている。障がい者では、「生活訓練」も3割以上が実施している。いずれも基準該当での実施となる。また、障がい児を対象とした「児童発達支援」は4割以上、障がい児・者とも対象となる「日中一時支援事業」も高い実施率となっていた。さらに、制度事業以外に「自主事業」を実施している事業所が、約半数に上る。障がいのない「子ども」への事業は制度事業としての実施が少ないが、自主事業でカバーしている。事業の対象の組み合わせで見た場合、高齢者も障がい者も子どもも多少としている事業所が全体の69%、高齢者と障がい者を対象としている事業所が22%となっていた。

2) 共生ケアの人員構成

利用状況から共生型の実態をみると、高齢者・障がい者・子どものいずれもが利用している事業所が4割以上を占めた。一方、高齢者のみの利用となっているところが23%あった。事業の組み合わせと利用の組み合わせの関係をみると、高齢者・障がい者・子どもを対象としている場合、すべての利用が見られた事業所が6割、高齢者と子どもの利用となっている事業所が2割、高齢者のみの利用となっている事業所が1割となっていた。障がい者は利用者とともに、有償ボランティアスタッフも場の構成員として含んでいる。

曜日や時間帯による利用者の変化をみると、土日・祝日で子どもの利用が多いこと、平日の場合、夕方にかけて子ども（障がい児）の利用が増加していることが明らかとなった。

3) エピソードにみる共生ケアの効果

高齢者・障がい者・子どもという多様な関係性について書かれたエピソードには、次の3点の共通点が見られた。第1に、多様な人が存在することで自分の役割を見出しやすいということである。高齢者が子どもに、障がい者が高齢者に、子どもが高齢者や障がい者になど、できることを通して、何かをしてあげるといった関係が、その場を居心地よくしていることが分かる。第2に、そうした関係性は特定の間人間関係の中で、より発揮されるということである。例えば、高齢者は「子どもたち」との交流を楽しみしているのではなく、特定の〇〇ちゃんとの関わりを楽しみにしているということである。第3に、家族の関係性を支えることができるということである。高齢者の親と障害のある子どもが一緒に利用することで、親密な親子関係を無理に切り離すことなく、閉鎖的になることを回避できる。

5. 考察

富山型デイの多くが複数の制度を組み合わせることで、共生ケアの利用の条件を確保し、障がい者スタッフや夕方や休日に障害児のニーズを受け入れることで、お年寄りだけではない多様な人間関係や、静と動といった時間の変化を生み出している。エピソードにみる多様な関係性の分析では、役割や居心地の良さだけでなく、家族支援にもつながっている。